

小中の学びをつなぐ古典の指導について

——「情」と「景」を読む和歌鑑賞の実践を通して——

浜岡 恵子

1. 研究の目的

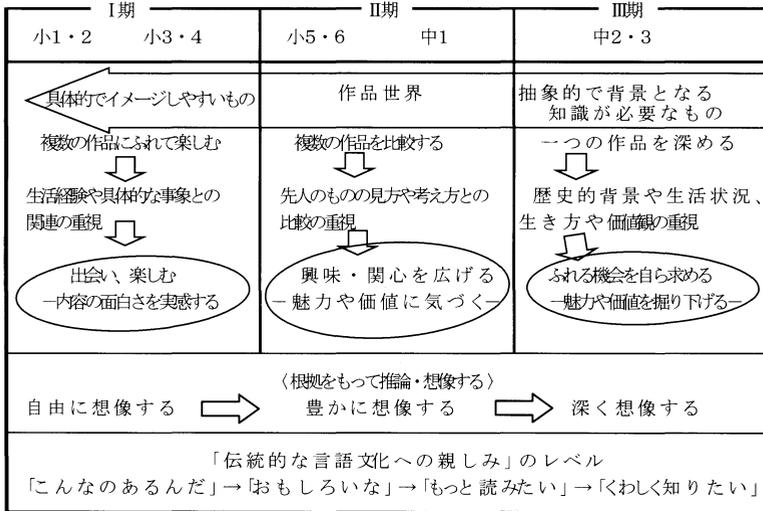
今回の学習指導要領改訂により、小学校でも中学校でも「伝統的な言語文化」が重視され、小学校の国語科教科書には多くの古文や短歌・俳句、漢文などが教材として取り上げられている。しかし、古典教材における小学校五・六年年の学習内容と中学校の学習内容は、重なり合う部分が多く、その系統性が曖昧になってしまっている。さらに、「伝統的な言語文化」は、有名な古典作品だけでなく、地域に受け継がれている文化・昔話・民話など多種多様で、教材開発の研究も求められている。

これまでの古典の教材を扱う授業を省みたとき、いくつかの限られた有名な古典作品を教材として扱うことが多かった。古典作品には、生活の中で聞き慣れない言葉が含まれ、その意味も理解しにくいなどの理由から、学習に対する抵抗感が生まれやすく、学習が受け身になってしまう傾向も見受けられた。また、教師の指導も音

読・朗読・暗唱の練習や訓練に傾斜したり、教師からの説明が多くなったりして、生徒から「苦手だ」「難しくて読む気になれない」といったつぶやきも聞こえてくる。

そこで、本校国語科では、小・中学校の九年間で児童・生徒の学びをつなぎ、「伝統的な言語文化」に生徒自身が主体的にかかわるような授業づくりの実現をめざすこととした。義務教育段階では、様々な教材を通して系統的・継続的に行う取り組みの中で、「伝統的な言語文化」に親しむ態度が育成されるべきである。また、さらに国語科の役割である「ことばの力」を身につけていくために、螺旋的・反復的な学習経験も必要となる。今の時代を生きる児童・生徒に多様な「伝統的な言語文化」にふれる機会を設け、その価値に気づき、実感できるような取り組みにしていきたい。

「伝統的な言語文化」に関する小・中9年間の学びのつながり



2. 研究の計画 — 三年次案 —

一年次（平成23年度）研究の方向性の明確化

○ 古典の授業における先行文献研究、教科書の古典教材把握

○ 研究の目的、III期（本校研究におけるIII期を指す 以下、同様）におけるめざす生徒像と学びのつながり、授業構想の作成

○ 各学年における俳句の授業実践、実践の成果と課題の明確化

○ 学びのつながりの吟味、2年次の研究計画の確認

二年次（平成24年度）研究の深化

○ 幅を広げての教材開発、その授業実践、実践における成果と課題の明確化

○ III期の生徒像と学びのつながりの吟味と修正、3年次の研究計画の明確化

画の確認

三年次（平成25年度）研究のまとめ

○ さらなる教材開発と授業実践、実践における成果と課題の明確化

○ III期の生徒像と学びのつながりの吟味と修正、次の研究の方向性の検討

○ 本研究は、二年次の実践を中心に行うものとする。

3. 授業実践

3. 授業実践

本校第二学年生徒は、前年、中学一年の古典学習において「名句

を味わう」として、俳句の鑑賞を行っている。松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶という江戸時代を代表する有名な俳人の作品と、教師が用意した偽物の作品を比較することで、どちらが本物の作品か見極める学習を行った。その結果、定型のリズムや語の意味、語感、構成といった点に着目して鑑賞し、その句ならではの良さに気づくことに一定の成果がみられた。しかし、その一方で中学一年生の段階では、作品を読む場合に自分の身に引きよせて読むことが難しい現状も課題としてみられた。その要因の一つとして生活経験の乏しさが作品世界への共感を阻んでいるということも考えられる。ただ、自分自身の生活経験がなければ文学作品を味わえないというわけではない。それを補い読むための知識と想像力を育む必要性を感じている。

そこで、第二学年の古典学習では、『百人一首』の和歌を鑑賞することに組み合わせた。和歌は、俳句と同様、限られた言葉の中にさまざまな技法を用いて、広く深い世界を表現する定型詩である。また、一人称の文学とも言われ、作者の視点から描かれた「情景」を読むのに適している。「情景」とは、それを見たり、その様子を思い浮かべたりする人の心に訴える場面であり、それは「情」≡作者の心情と、「景」≡和歌の風景から成り立つと考える。つまり、和歌を読むとは、和歌に詠まれた風景と作者の心情の両面を鑑賞することである。生徒自身で、和歌の「情」と「景」の両面を読むことができようにする指導のあり方を探り、作者に共感しながら和歌を鑑賞できるようにすることをめざした。

具体的には、和歌を鑑賞する際、『百人一首』の和歌とその詞書を

もとに、歌日記を書くという言語活動を取り入れることによって、作者の想いを深く読み取り、豊かに表現することができるようになるのではないかと考えた。この方法を検証するために、本校二学年二クラス（79名）を、処遇群と対照群、二つに分けて別々の指導を試みる。この二クラスの「書く力」（6月下旬に実施した国語科一学期期末テスト結果）をt検定（片側検定）を用いて検証したところ、「書く力」において有意差は見られなかった。

指導の具体的な方法は、次のように行った。まず、全員に和歌の表現技法である「掛詞」を理解させる。和歌の表現技法が様々ある中で、特に「掛詞」に注目させるのは、「掛詞こそ和歌のレトリックの中心になるもの」（渡部、2009）とも言われ、一語に二つの意味をもたせたり、二つのストーリーをも作ったりすることができる技法だからである。ものや風景に自分のあり方や心情を重ねて表現するこの技法を、読むための知識としてⅢ期の生徒達が獲得することで、見えてくる世界が広がり、鑑賞を深めることができると考える。

次に、処遇群の生徒には、和歌とともに詞書を読み、それらを手がかりにして歌日記を書く活動を設定する。ここで言う歌日記とは、生徒が和歌の作者になりきり、和歌の詠まれた経緯を日記風に書き換えたものを指す。日記というスタイルをとるにより、和歌や詞書にある言葉や事柄を、作者が置かれた状況として想像することが容易になると考えたからである。一方、対照群の生徒には、詞書にある内容を、教師が説明するという形で示す。（表1参照、処遇群の学習過程については、後に詳しく示す。）

鑑賞文を書く前に「歌日記を書く」という活動を取り入れ、作者への同化的体験を取り入れることで、生徒の想像力を刺激し、より深く共感的に鑑賞することができるようになるかどうか、鑑賞文を質的に評価することで検証する。

第二次 「百人一首」から自分が関心をもった和歌を選び、鑑賞文を書く（1時間）

【実施期間】

平成二十四年十一月～十二月

【指導計画】

第一次 和歌の読み方を学ぶ（5時間）

【授業の実際】

処遇群の学習過程の概略を示す。

学習活動と内容

◎和歌の言葉は三十一文字か？（掛詞）について

□和歌の読み方をマスターする。

・「鑑賞する」にはどうすればよいか。

・和歌の言葉⇨作者が選んだ言葉⇩なぜその言葉を選んだのか？

・なぜその言葉でなくてはならなかったのか？

・作者の心情を表現する仕組みを知る。

・限られた言葉を最大限に活かす。⇩言葉を2倍にする

方法

「ホントノキズナ」

⇨本との絆、本当の絆

・『百人一首』の和歌の中から、掛詞を読み解く。

花の色はうつりにけりないたずらに

指導上の留意点

○心情を表現する仕組みとしての和歌の技法（掛詞）を理解させる。

・一つの語に、意味の異なる同音の語を重ねて、2通りの意味をもたせる技法であること

・一つが自然の事物（景）を表し、もう一つが人間にかかわること（情）を表していること

○この歌の掛詞がどのような意味で用いられているのか確認させる。

ふる⇨時間が経つ、（雨が）降る

ながめ⇨容貌、長雨

我が身世にふるながめせしまに

小野小町

○どのような場面で歌は生まれるのか？（「詞書」について）

人はいさ心も知らず

ふることは花ぞ昔の香にほひける

紀貫之

□紀貫之の歌日記（例）を読む。

□「百人一首」中、提示された和歌から、一首選んで歌日記を書く。

わびぬれば 今はた同じ難波なる

身をつくしても逢はむとぞ思ふ

元良親王

吹くからに秋の草木のしをるれば

むべ山風をあらしといふらむ

文屋康秀

このたびはぬざもとりあへず手向山

紅葉の錦神のまにまに

菅原道真

大江山いく野の道の遠ければ

まだふみも見ず天の橋立

小式部内侍

○「詞書」は、和歌の前に添えられ、どんな 場面で詠んだのか、なぜその歌を詠むことになったのか など、作者及び作者の状況を 知るための手がかりになることを説明する。

○前半二句の現代語を示し、後半四句の言葉を手がかりに、歌の意味を考えるようにする。

○歌日記を書く際の留意点を確認する。

・作者になりきって書くこと

・和歌と「詞書」の内容は変えないで用いること

・書かれていないことは、自由に想像して良いこと

○それぞれの歌の詞書に現代語訳を添えて示す。

○歌の特徴、面白みに気づかせる。

・「身をつくしても」＝身を尽くす、濫標

・山＋風↓嵐 文字遊びのおもしろさ

・このたびは＝この度は、この旅は

とりあへず＝取るものも取りあえず急いで、取りあえずまず

手向山＝手向山の紅葉、紅葉を手向ける

・いく野＝生野、行く野

まだふみも見ず＝まだ文を見ていない、まだ踏んだこともない（行ったこともない）

<input type="checkbox"/> 歌日記の交流を通して、作者が和歌に込めた思いに迫ろう。 <input type="checkbox"/> ワークシートで和歌の意味を確認し、朗詠する。 <input type="checkbox"/> 歌日記を披露する。 <input type="checkbox"/> 和歌に込められた意味について、作者に扮した生徒に質疑・応答をしながら、読みを深める。 <input type="checkbox"/> 和歌の鑑賞文を書く。	<input type="checkbox"/> 歌日記に、次のような事柄が押さえられているか確認する。 ・場面（季節、時間、風景） ・心情 ・表現技法（掛詞など） <input type="checkbox"/> 和歌の読みを深めるための質問になるよう指導する。 <input type="checkbox"/> 歌日記の交流によって、新たに気づいたことや読みが深まったことをもとに鑑賞文を書くよう指導する。
---	--

4. 結果と考察

今回の学習を通じて、「景」と「情」の両面を読むことができたかについて、学習後に書いた鑑賞文を処遇群・対照群で比較する。

鑑賞文の評価ルーブリック

評価	観点	処遇群	対照群
A	和歌の「景」と「情」を、言葉で表現された部分だけでなく、表現されていない部分も読み取り、共感的に鑑賞している。	52.5% (21人)	28.2% (11人)
B	和歌の「景」と「情」を、言葉で表現された部分について正確に読み取り、鑑賞している。	35.0% (14人)	56.4% (22人)

C	和歌の「景」と「情」のいずれかが正確に読み取れておらず、主観的に鑑賞するに止まっている。	12.5% (5人)	15.4% (6人)
---	--	---------------	---------------

評価Aに該当する生徒の割合は、処遇群が対照群を大きく上回る。この結果より、歌日記を書く活動は、和歌の「景」と「情」の表現されていない部分を共感的に読むために、有効であったと考えられる。

評価をAとした生徒の鑑賞文（抜粋）を挙げる。
 （下線は筆者による）

【文屋康秀「吹くからに：」】

○作者がどんな思いでこの歌を詠んでいたかという点、最初はマイナス思考の思いが強かったと思います。しかし、ここで「山から吹く風」と「荒々しい風」から「嵐」を思いつき、「おもしろいものを発見したぞ!」というプラス思考の気持ちに変

わったと思えました。この歌を読んで感じたことは、日々の小さな発見から歌を作り上げていることです。(処遇群、女子)

*「ここで…変わった。」と言う表現に、作者との共時的な感覚をもっている。また、歌の場面が作者の日常の中にあることの推察が書かれている。

○今は秋で紅葉がきれいなのに、この山風が荒らしてしまつた。そう思った時、作者はこの歌を思いつきました。(中略) 僕はこれ聞いて、嵐を身をもって体感して気づいたことを歌にする才能がすごいと思えました。また、この歌を考えついた時のおもしろさや驚きなども伝わってきました。(処遇群、男子)

*「この」「そう思ったとき」「これ」などの指示語を用いており、作者に近い視点で和歌の場面を想像し、感じたことを表現している。

【菅原道真「このたびは…」】

○「このたびは」「この旅は」と「この度は」の掛詞で、「今回の旅は」という意味になるのだが、ここに「普段は忘れないが、今回はめずらしく」と強調しているような気がする。しかし、あの賢い道真が幣を忘れるわけがない。あまりに美しい紅葉を供えるためにウソをついたのでは？というふうに考えていると、この歌を詠んだときの道真の気持ちが無限に広がっていく。(略) (処遇群、男子)

*「掛詞」に注目し、この言葉の表の意味とその奥に隠された作者の心情を探ろうとしている。

【小式部内侍「大江山…」】

○代作ではないかと疑われた作者が「いく野」とか「まだふみもみず」などの掛詞を使って「母のいる生野には行ったこともない」、「母からの文は見たこともない」と切り返しているが、これは、地名などを用いて代作でないことを証明するための自分の行動を説明しながら、同時に、疑われたことに憤りを表している。(処遇群男子)

*代作でないことを説明するに止まらず、疑われた時の心情を詠み込み、相手に切り返す二重の文脈を理解している。

○「母に代作してもらっている」と皮肉を言ってきたので、作者は、落ち着いて冷静、かつあざ笑うようにこの歌でやり返している。とても悔しかったと思うが、立派だ。でも、この歌にはもう1つ意味があり、たくさんの地名を詠んだのは、丹後国にいる母を思う気持ちが隠されているからだと思つた。(対照群、女子)

*「母を思う気持ちが隠されているからだと思つた」とあるように、掛詞になつている地名から作者の心情を推察している。

このように、和歌を歌日記という散文に書き換える際、足りない言葉を想像力で補つたことが、鑑賞文を書く時にも活かされている事例が多く見られた。A 評仙処遇群生徒の鑑賞文に見られる「この」や「これ」など近称の指示語や、和歌の場面を現在形でとらえている表現は、事前に歌日記を書いたことで、作者に同化し、作者が和歌を詠んだ時や場面を共有したからではないかと考える。その結果、

自然と作者に共感的な態度で鑑賞文を書くことにつながったと推察される。対照群にも、A評価の生徒はいるが、処遇群の半数程度に止まっていた。

また、掛詞を鑑賞にどう活かしているかであるが、目指すのは、掛詞の一方の意味が和歌の詠まれた場面を説明する文脈に使われており、もう一方は、作者自身の心情につながる文脈を生み出していることが読み取れていることである。例えば、60番「大江山……」の鑑賞文に、「代作ではないかと疑われた作者が……」とあるのは、「掛詞」が、和歌の詠まれた場面Ⅱ「景」と作者の心情Ⅱ「情」を表現する手立てであることを理解しているからこそその読み取りと言える。このような鑑賞をするためには、表出していない意味を引き出すための想像力が不可欠である。

対照群生徒の鑑賞文にB段階が多かったのは、和歌の意味は正確にとらえることはできているが、和歌をひとまとまりに解釈し、和歌の言葉から作者の心情を想像するというよりは、全体を解説するような読み取りになってしまったからではないかと考える。処遇群C評価の生徒は、歌日記を書く段階で、間違った解釈をしていたり、作者のおかれた状況を十分に想像できていなかったりしたことが、鑑賞文を書く際にも影響したと思われる。この傾向は対照群C評価の生徒にも見られ、この点では、処遇群、対照群ともに差はない。鑑賞する前に、生徒がつまりやったり困難に感じている点については、教師が丁寧に説明するなどして、修正できるようにする必要があったと考える。

5. まとめ

生徒が主体的に、和歌を楽しみ、親しむための手だてとして、和歌を作者に共感しながら、鑑賞する授業を構想した。そのために「歌日記を書く」という活動を入れることは、概ね有効であった。日記を書く活動を経ることで、和歌の言葉をより正確に読みとろうとしたり、言葉と言葉の隙間を想像してつなげようとしたりする様子が、生徒の鑑賞文に見られる結果となった。和歌の「景」と「情」の両面を、生徒自身を読みとるための知識や想像力を育むことに一定の成果があったと考える。このことは、言葉に込められた作者の思いを理解し、感動することができると三期の目指す生徒像の姿につながると考える。「歌日記」を書かせるにあたり、特に配慮したこと二点を述べる。

第一に、教材の選択についてである。百首の和歌からどの歌を取り上げるかは、内容が中学2年生の生徒にも理解できるものであることと、和歌に詞書が添えられていることを必須条件とした。言葉自体は意味を調べればわかるが、当時の常識・生活習慣など歴史的・社会的な内容を多く踏まえているものは、中学生にとって読解が難しいと判断した。また、詞書が添えられたものにこだわったのは、日記を書くうえで、作者に関わる情報を、少しでも多く示したいと考えたからである。

第二に、歌日記を書かせる前に、教師がモデル文を示したことがある。「与えられた情報を、『歌日記』にどう活かすのか」というこ

とは、共感的に和歌を読む際に重要なポイントとなる。ただし、これらの情報は、教師から一方的に知識を伝達・注入するのではなく、多様な読みにつながらない。言葉から読み取った事実を書く部分と、言葉と言葉をつなぐために自由に想像して書いて良い部分があることを、モデル文を使って説明した。

他方、今回の課題として挙げられるのは、作者に同化するために必要な知識が不足している生徒への対応が不十分であったことである。既習の事柄が十分でない場合、自分（現代）の感覚で解釈したまま、誤った理解であることにも気づきにくい。自由な想像を期待しているものの、和歌を離れて勝手な想像になっては鑑賞したことにはならない。学習の途中で、修正できるような段階を、もう少し細かく入れる必要がある。

これからも児童・生徒たちを、魅力ある作品に出会わせていくことで、「古典は難しいけどおもしろい」に導いていきたい。

なお、この報告は筆者が勤務校にて実践し、広島大学附属東雲中学校研究紀要第四四集に掲載したものに、第五十四回広島大学教育学部国語教育学会で学会の先生方からいただいたご助言を加筆、作成した。あらためて感謝を申し上げます。

引用・参考文献

- 府川源一郎・高木まさき・長編の会編 『認識力を育てる「書き換え」学習中学校・高校編』、東洋館出版、2004。
国立教育政策研究所 『教育課程実施状況調査』、2005。
文部科学省 『中学校学習指導要領解説 国語編』、教育出版、2008。

小町谷輝彦『小倉百人一首』文英堂、2000。

浜岡恵子ほか「古典を主体的に読むための指導法の研究―俳句鑑賞の視点をもたせる指導を通して―」広島大学附属東雲中学校研究

紀要『中学教育』第四十三集、2011、pp.7-13。

渡部泰明『和歌とは何か』岩波新書、2007。

(広島大学附属東雲中学校)